

小宇宙に広がる白と赤の世界！

●古河のまちを歩く・その4！

小旅行当日は、「古河文学館」を出てバスで食事処へ移動するのですが、この日は「文学館」2階のレストランでパスタランチにしました。

午後1時、「古河篆刻美術館」【写真①】に向かいました。

◆古河篆刻美術館

平成3年春に開館した日本で初め



ての篆刻専門の美術館です。旧城下町の石町通りに面して大正9年に建設された3階建て石倉を改修したものです。展示室も当時の雰囲気を残しています。篆刻は書道芸術のひとつで、700年ほど前に中国でおこりました。四書・五経や漢詩などから語句を選び篆書という古文字を用いて柔らかい石に刻んで紙に押したものを鑑賞するものです。館内には、古河出身の故生井子華（いくいしか）の遺作を中心に、篆刻にかかわる封泥や石印材を常設展示しております。また、本建物は国の登録有形文化財です。

◆印章と篆刻の歴史

中国の封泥時代には、紙ではなく木や竹に書写していました。紙はすでに発明されていましたが高価で、木竹は安価で豊富に供給されたために、紙の使用が一般化する紀元3~4世紀まで封泥の時代は続きました。紀元6世紀になると、紙に朱泥で印を捺す用法に移行し、封泥の習慣がすたれ、印章に変化が生まれました。封泥用印章は、泥塊上で文字を鮮明に出すために陰刻ですが、朱泥を用いて紙に捺す印は、陽刻へと変化しました。封泥は、印章と同様に重要な働きをしました。

こうして、白文・朱文の2種類が生まれました。印の大きさも、身に帯て封泥に用いた秦漢魏普時代は一寸四方でしたが、南北朝時代になると、役所に常備して事務的文書処理するために大型化しました。実用的な事務用品化です。

隋唐以後の官印制度は、日本へは遣隋使以降、律令制度とともに伝わり、現在に至っています。宋代になり、篆刻に対する関心が芽生え、文人の教養と



しての書画において、印章が重要な存在となりました。宋代の書画が日本へ伝えられるに伴い、落款印・鑑藏印使用の習慣も伝わり、室町時代以降の私印使用へと向かいました。

実用としての印章に対し、文房清玩の世界に属す篆刻は、鑑賞及び作者証明が目的の印といえます。約300年前、中国の篆刻が日本に伝わり、日本でも篆刻が始まりました。そして古河では、日本を代表する篆刻家生井子華・大久保翠洞2先生を輩出しました。【写真：生井子華先生作品鮮車怒馬】

〔篆刻美術館 館長 松村一徳〕

* *

生井子華氏が彫られる静かな時間と篆刻刀で彫り進められる緊張の瞬間をDVDで愉しませていただき、続いて隣の「古河街角美術館」【写真⑤】へ。

* *

◆古河街角美術館

古河街角美術館は、美術分野における市民創作活動の発表の場として、市民が日常気軽に利用し、また先人の優れた作品の鑑賞の場としても利用し、ひとびとにうるおいをもたらそうと平成7年3月に開館しました。1階の展示室は、常設展示コーナーです。2階の2つの展示室を市民ギャラリーとして貸し出しています。河鍋暁斎や奥原晴湖の生誕地、篆刻美術館とも近く、古河の美術史を楽しむ環境にもあります。2階休憩室では、世界の美術のビデオやLDを鑑賞することができます。



* *

この日は、色鉛筆画クラブの人たちの展示会が市民ギャラリーで行われており、力作に心癒されました。そして最後は「永井路子さん旧宅」【写真⑥】。

◆永井路子さん旧宅

直木賞作家、永井路子さんの旧宅を修復し一般公開しています。永井さんは東京生まれで、間もなく母親の郷里である古河へ移り、結婚するまでの約20年間を過ごしました。旧宅は江戸末期に建てられたもので、約93平方メートルの2階建土蔵造りの建物です。1950年代に永井家から別の所有者へ譲渡されたのですがその際、店蔵の南側部分にあった木造平屋建ての住宅約38平方メートル部分は取り壊されてしまいました。修復された旧宅には、永井さんの幼少期から青春時代の写真のほか、永井さんの経歴を紹介するパネルや作品などがあります。【写真や文は「こがナビ」より】

